

趣味のひとつ オールディーズ

第7巻 日本のフォークソングとグループサウンズ

今回は日本のフォークソングと、日本独特の音楽ジャンルとなったグループサウンズ（以下GS）を取り上げたいと思います。

◆フォークソング・ブームの始まり

アメリカのフォークソング・ブームに影響を受け、1966年にマイク眞木（昭和19年生）が「バラが咲いた」をヒットさせ、日本でもフォークソング・ブームが始まりました。バラと言えば「野バラ咲く路」を市川染五郎（現松本幸四郎 1942年生）が歌って、余りの素人っぽさが逆に受けました。娘の松たか子も歌っていると聞きました。

◆日本のレノン/マッカートニー

翌67年の大ヒット曲「帰って来たヨッパライ」でブームはさらに盛り上がり、フォーク・クルセダーズは一躍時の人になります。「イムジン河」「悲しくてやりきれない」「青年は荒野をめざす」「戦争は知らない」などグループとしての活躍だけでなく、解散後のメンバーもそれぞれ活躍しました。はしだのりひこ（昭和20年生）は1969年「風」（シューベルツ）や1971年「花嫁」（クライマックス）をヒットさせ、北川修（昭和21年生）と加藤和彦（昭和22年生～平成21年没）は1971年「あの素晴らしい愛をもう一度」をヒットさせました。北川と加藤の二人は「日本のレノン/マッカートニー：（修/和彦）」だと個人的に思っています。

◆色つきフォークソング

何故かフォークソングには色がついたグループ名や曲名が多いですね。色を付けることでクリーンなイメージを強調したかったのでしょうか。教科書にも載っている「翼をください」や「竹田の子守唄」を歌った赤い鳥、「太陽がくれた季節」をヒットさせた青い三角定規、「遠い世界に」の五つの赤い風船が代表的です。曲名ではベッツィー&クリスの「白い色は恋人の色」（修/和彦）、ビリー・バンバンの「白いブランコ」、ズー・ニー・ズーの「白いサンゴ礁」、ふきのとうの「白い冬」、「あのねのね」の「赤とんぼの唄」、かぐや姫の「赤ちょうちん」、あがた森魚の「赤色エレジー」などがあります。

◆グループサウンズの長髪派と短髪派

ある資料によると、GSのトップ10は、「ブルー・シャトウ」「エメラルドの伝説」「花の首飾り」「思い出の渚」「長い髪の少女」「モナリザの微笑」「夕

陽が泣いている」「シーサイド・バウンド」「青い鳥」「小さなスナック」だそうです。タイガースが3曲もランキング入りさせていますが、やはりグループサウンズの代表曲と言え、「ブルー・シャトウ」です。“森・トンカツ、泉・ニンニク、囲・コンニャク、まれ・テンプラ…”と子供達も歌っていましたね。GSの中で唯一、レコード大賞（昭和42年）を受賞した曲でもあります。ブルー・コメッツはリーダーのジャッキー吉川（昭和13年生）、キーボードあごひげの小田啓義（昭和14年生）、ギターのイケメン三原綱木（昭和20年生）、ベースギター真面目そうな高橋健二（昭和13年生）に管楽器七三分けの井上大輔（本名忠夫 昭和16年生～平成12年没）がメンバーで、ワイルド・ワンズとともに当時、NHKの出演が許されたのは、ともにヘアスタイルが短髪だったからと言われました。

- ・短髪グループでは、ビレッジ・シンガース「亜麻色の髪の乙女」、ザ・サベージ「いつまでもいつまでも」、ブロードサイド・フォー「若者たち」やランチャーズ「真冬の帰り道」などがあり、カレッジ・フォークと呼ばれたグループもあります。長髪グループでは、テンプターズ「神様お願い」、ジャガース「キサナドゥの伝説」、スパイダース「あのとき君は若かった」などがあり、長髪派と短髪派で人気を二分していました。

いかがでしたか。日本のフォークソングとグループサウンズを懐かしんでいただけたでしょうか。今回は「ソウル・ミュージック」を特集します。

<GS育ての親>

フォークソング・ブームは修/和彦が牽引しましたが、グループサウンズの牽引者と言えば、すぎやまこういち（昭和6年生）、橋本淳（昭和14年生）、筒美京平（昭和15年生）の三人です。この三人が関わった曲の一部ですが、「バラ色の雲」「スワンの涙」「マドモアゼル・ブルース」「僕のマリー」「銀河のロマンス」「遠い渚」などがあり、GSの他にも、いしだあゆみ（昭和23年生）の「ブルーライト・ヨコハマ」や平山三紀（昭和24年生）の「真夏の出来事」など当時流行った曲を作っています。これらの曲の作曲者は、すぎやまこういち、筒美京平のいずれかですが、作詞は全て橋本淳です。また、この三人には、橋本淳が大学の一年後輩の筒美京平とバンドを組んでいたことがあり、在学中に作曲家の、すぎやまこういちに弟子入りしたと言う縁があります。GSはこの三人に育てられたと言えるでしょう。